

小城三月（小さな街の三月）

蕭 紅

（訳 小林美恵子）

四

ある年の冬、年が明けてすぐに翠叔母が我が家に来た。

伯父の息子——私の従兄もちょうど家にいた。

従兄はハンサムで鼻筋が通り、目は黒々、口元もすてきで、髪も格好良く、背は高く、颯爽と歩いた。私たちの家族の中で彼ほど格好良い人はいなかった。冬、学校は冬休みになり、彼は我が家で休暇を過ごした。たいいそれほど長くはいなくて、学校が始まるとすぐに帰って行った。従兄はハルビンで勉強していたのだ。

我が家の音楽会はおのずとこの新しいメンバーのために開かれた。翠叔母ももちろん参加した。

にぎわいは相当なもので、たとえば母はこんなことは全然理解しなかったが、それでも一緒に座って、傍で見ていたし、家の料理番や女中も皆仕事の手を休めて見に来た。彼らは何かの楽器を聞きに来たのではなく、人を見に来たようだった。客間は私たち皆ででいっぱいになった。楽器の音は多分遠い隣家にさえも届いたのだろう。次の日、隣の人が遊びに来て言った。

「昨晚は何かお祝い事があったんですか？」

私たちは従兄が帰ってきたので歓迎したのだと言った。

こんなふうに我が家はとても楽しく、面白かった。まもなく正月十五日、元宵節の時期が来た。

我家では父の維新革命以来、家の中では兄弟姉妹いつも同等で、遊ぶときも一緒に遊び、何かを面白いものがあれば一緒に見に行った。

伯父は私たち一従兄、弟、女たち、全部で八、九人を引き連れ、満月の

市街に繰り出した。道がすべり、立っていることもできず、その上でこぼこしていた。男の子たちが先に立ち、私たちはゆっくり歩いたので置いて行かれた。

すると前のほうの男の子たちは振りむいて、私たちをからかって、お嬢さんたち、女神様たち、歩けないんだねと言った。

私と翠叔母はさっそく一列になって前に突き進んだが、私が倒れなければ彼女が倒れた。そのあとでやっとならぬ従兄たちが次々に来て支えてくれ、支えてくれるというので、こわごわとながらも、ただ彼らと一列に並んで前に進んだ。

ほどなく、街に着くと、道いっぱいには花燈がともし、人がいっぱいだった。そして、獅子や跑早船〔船形に人が入って歌い踊るもの〕、龍燈、ヤンコ舞が次から次へと現れて、一度には数え切れないほど。どこからか現れて目の前を、ただ、さっと通り過ぎて行き、またすぐに別のがやって来て去っていく。実際あまりに華やかすぎて全部をちゃんと見るなどはとてもできず、世の中にこんなのにぎやかなものはないと思われた。

商店の前には大きな火がたかれ、まるで熱帯の大きな椰子の木のようなだった。一つひとつとますます明るい。

私たちは一軒の店に入った。そこは父の友人が経営する店だ。彼らは私たちをお茶、お菓子、みかん、元宵団子でもてなしてくれた。

私たちにはとても食べきれないでいると、外から太鼓の音が聞こえ、わくわくした。太鼓やラッパの音が大きく鳴り響き、一陣がやってきて、それがまだ終わらないうちにまた次が鳴り響いた。

もともとそれほど大きな街ではないから、知人も多く、皆この祭りを見に来て出会うのだった。中に、ハルビンで勉強しているこの街の何人かの男子学生たちも来ていた。従兄は彼ら皆と知り合いだった。私も彼らを知っていた。というのもこのころ私たちはハルビンで学んでいたからだ。そこで、出会うと私たちは彼らと一緒にになり、彼らは花燈を見に行き、ちょ

っと見るとまた私たちのいる所に戻って、伯父と話したり、従兄と話したりした。我が家はわりと勢力を持っていたので、彼らが私たちと付き合いたいのだと私にはわかった。

それで帰り道ではまた二人の学生が増えた。

好き嫌いとはもかく、彼らの服装はまあまあ都会的だった。

それぞれ洋服を着て、中折帽をかぶり、膝丈のオーバーを着て足元がすっきりしている。私たちの街の、例のへんてこなオーバー、まるで丈長の綿入れのようなのと比べてもとてもすてきだった。そして首にはマフラーを巻き、そのマフラーにはもちろん細い編み込み模様が入っているのだ。マフラーをすると人はいっそう貫禄があり立派に見えるようだ。

翠叔母は彼らそれぞれがすてきだと思った。

従兄も洋服を着ていたし、もちろんすてきだ。だから彼女は路上で従兄をずっと見ていた。

翠叔母はゆっくりと髪を梳き、一筋の乱れもなくきちんと髪を梳き、白粉を塗っては洗い落とし、洗い落としてまた塗り、満足がいくまでおめかしした。元宵節の二日目の朝、彼女はさらにゆっくり髪を梳き、梳きながら思いにふけた。

もともと毎朝朝ご飯を食べるにも、二、三度催促されて席につくのだったが、この日は四度も呼ばれて彼女はやっと出てきた。

私の伯父は若い頃も立派で勇ましい人で、乗馬も鉄砲打ちもきわめて上手だった。すでに五十歳になっていたが、見かけも若々しかった。私たちは皆、伯父を愛していたし、伯父も小さいときから私たちを愛してくれた。詩や文章なども皆、伯父が私たちに教えてくれた。翠叔母が我が家にいると、伯父は翠叔母も可愛がった。この朝、朝食はすでに始まっていた。翠叔母を何度か急きたてたが全然出てこない。

伯父が一言言った。「林黛玉……『紅樓夢』のヒロイン。繊細でプライドの高い美少女] ……」

そして家中みんなが笑い出した。翠叔母が出てきて、私たちがこんなふうに笑っているのを見て、何を笑っているのと聞いた。私たちは誰も教えようとしなかった。翠叔母は自分が笑われたとわかって言った。「早く教えてよ。もし教えてくれなければ、今朝は私ご飯を食べないわ。あなたたちは勉強して字を知っているけど私にはわからないからバカにしているのね……」

しばらく騒ぎになり、やはり従兄が彼女に言い聞かせた。伯父は息子の目の前できまりがわるそうだったが、酒をちょっと飲み、どうにか逃げ出した。

翠叔母はこのときから勉強について考えるようになったが、すでに二十歳になっていたし、どこに行けば勉強できたのだろうか？ 小学校にはそんなに大きい生徒はいないし、中学に行こうにも彼女は一字も知らないのだからどうにもならない。そこで相変わらず我が家にいた。

琴を弾いたり、笛を吹いたり、カルタをしたりして、私たちは昼から夜まで遊んだ。私たちが遊ぶときは、伯父も、従兄も私の母も、みんなが加わった。

翠叔母は従兄に対して別に特別によくしたということはないし、従兄も翠叔母に対して、私たちに対するのと同じようだったというか、まったく同じだった。

しかし、従兄が物語をするとき、翠叔母はいつも私たちよりも注意して聞いていたし、それは彼女が私たちよりも少しばかり上で、当然理解力の上でも、私たちよりもさらに従兄に近かったからだ。従兄は翠叔母に対して私たちに対するより少し遠慮していた。彼は翠叔母と話すときは、いつも「そうです」「そうです」と言ったが、私たちにはきまって「そうだよ」「そうだよ」と言った。これはあきらかに翠叔母がお客だったからだし、そのうえ、輩分〔親族中の世代〕も彼より上だったからだ。

しかし、ある夕飯の後、翠叔母と従兄は二人ながらいなくなった。毎晩

夕飯の後にはたいてい音楽会が行われるのだった。この日は伯父が家にいなかったのかもしれない、だれも言い出すものもなかった。みんな夕飯のあとはそれぞれに散っていった。客間にはだれもいなかった。私は弟を探して将棋でもしようかと思ったが弟も見えなかった。そこで、一人で客間でオルガンを弾き始め、ちょっと遊んだが全然面白くなかった。客間はとても静かだったが、私がオルガンのふたを閉めたあと、家の中で物音が聞こえ、私の部屋に誰かがいるようだった。

私は翠叔母が部屋にいるのだと思った。急いで行って彼女を誘いカルタをしようと思った。

私が駆け込んでみると、翠叔母だけでなく従兄と一緒にいた。私を見て翠叔母はすぐに立ってきて言った。

「いっしょに遊びましょう」

従兄も言う。

「将棋をしよう。将棋を」

彼らは私といっしょに将棋をしたが、このとき従兄はずっと負け続けた。それ以前は彼はよく私に勝ったから、私はなんだか変だと思った。でも私はとてもうれしかった。

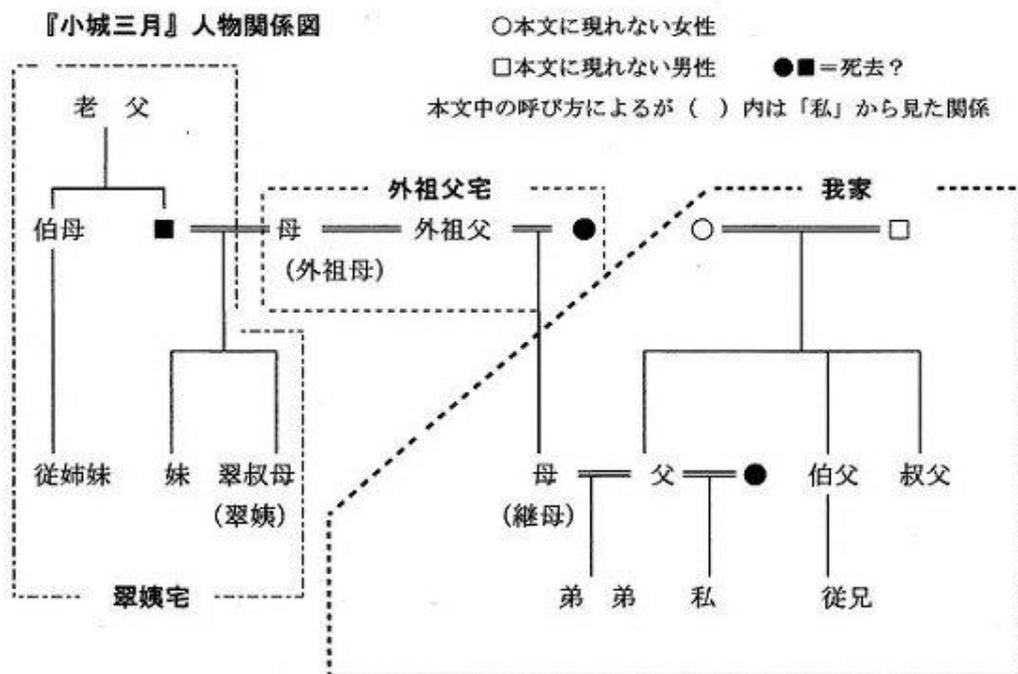
まもなく冬休みが終わった。私はハルビンの学校に戻った。しかし従兄と一緒に来なかった。というのも彼は半年ほどちょっとした病気を患っていて、以前もしばらく入院したし、今回は伯父が、従兄が二ヶ月休みをもらって家に留まるように取り決めた。

以後の家の事情は私にはよくわからない。すべて従兄と母が話して聞かせてくれたことだ。私が行ってしまった後も、翠叔母はまだ家にいた。

その後母がやはり言ったことがあるが、それは翠叔母の婚約前のことだったが、こんなことがあった。私の親族の中にある青年がいた。彼は兄とだいたい同じくらいの年齢で、話すときどもり、風采もあがらなかったが、兄と同じ学校で学んでいた。彼も私の家に来たことはあったが、翠叔母は

会ったことがなかった。そのとき母方の祖母が翠叔母を彼と結婚させようと主張した。我が一族の祖母は聞くなり拒絶した。というのは、未亡人の子どもは、運が良くないし、しつけがない、まして父親がなくなり、母が再婚している。立派な女は二夫にまみえないものだし、そんな人の娘では困るというのだ。しかし私の母によれば、輩分は合っているし、彼の家は金持ちだし、翠叔母が輿入れすれば政府高官のような暮らしで、いじめられることはないだろうと言うのだった。

このことについては翠叔母も理解していたが、今日再び従兄に会って、彼女は従兄もきっとそんなふうに見えるのだろうと思わずにはいられなかった。彼女は自分は運命に恵まれなれないと感じた。今は翠叔母自身すでに婚約していて別の人のフィアンセだし、それに彼女は再婚した未亡人の娘だし、と、彼女は毎日何度となくこのことを自分に言い聞かせ、はっきりと肝に銘じていた。



娘娘。说我们走不动。

我们和翠姨早就连成一排向前冲去，但是不是我倒，就是她倒。到后来还是哥哥他们一个一个地来扶着我们，说是扶着，未免的太示弱了，也不过就是和他们连成一排向前进着。

不一会儿到了市里，满路花灯。人山人海。又加上狮子、旱船、龙灯、秧歌，闹得眼也花起来，一时也数不清多少玩艺。哪里会来得及看，似乎只是在眼前一晃，就过去了，而一会儿别的又来了，又过去了。其实也不见得繁华得多么了不得了，不过觉得世界上是不会比这个再繁华的了。

商店的门前，点着那么大的火把，好像热带的大椰子树似的。一个比一个亮。

我们进了一家商店，那是父亲的朋友开的。他们很好的招待我们，茶、点心、橘子、元宵。我们哪里吃得下去、听到门外一打鼓，就心慌了。而外边鼓和喇叭又那么多，一阵来了，一阵还没有去玩，一阵又来了。

因为城本来是不大的，有许多熟人，也都是来看灯的都遇到了。其中我们本城里的在哈尔滨念书的几个男学生，他们也来看灯了。哥哥都认识他们。我也认识他们，因为这时候我们到哈尔滨念书去了。所以一遇到了我们，他们就和我们在一起，他们出去看灯，看了一会儿，又回到我们的地方，和伯父谈话，和哥哥谈话。我晓得他们，因为我们家比较有势力，他们是很愿和我们讲话的。

所以回家的一路上，又多了两个男孩子。

不管人讨厌不讨厌，他们穿的衣服总算都市化了。个个都穿着西装，戴着呢帽，外套都是到膝盖的地方，脚下很利落清爽。比起我们城里的那种怪样子的外套，好像大棉袍子似的好看的多了。而且颈间又都束着一条围巾，那围巾自然也是全丝全线的花纹。似乎一束起那围巾来，人就更显庄严，漂亮。

翠姨觉得他们个个都好看。

哥哥也穿的西装，自然哥哥也很好看。因此在路上她直在看哥哥。

翠姨梳头梳得是很慢的，必定梳得一丝不乱；擦粉也要擦了洗掉，洗掉再擦，一直擦到认为满意为止。花灯节第二天早晨她就梳得更慢，一边梳头一边在思量。

本来按规每天吃早饭，必得三请两请才能出席，今天必得请到四次，她才来了。

我的伯父当年也是一位英雄，骑马、打枪绝对的好。

后来虽然已经五十岁了，但是风采犹存。我们都爱伯父的，伯父从小也就爱我们。诗、词、文章、都是伯父教我们的。翠姨住在我们家里，伯父也很喜欢翠姨。今天早饭已经开好了。催了翠姨几次，翠姨总是不出来。

伯父说了一句：“林黛玉……”

于是我们全家的人都笑了起来。

翠姨出来了，看见我们这样的笑，就问我们笑什么。我们没有人肯告诉她。翠姨知道一定是笑的她，她就说：

“你们赶快的告诉我，若不告诉我，今天我就不吃饭了，你们读书识字，我不懂，你们欺侮我……”

闹嚷了很久，还是我的哥哥讲给她听了。伯父当着自己的儿子面前到底有些难为情，喝了好些酒，总算是躲过去了。

翠姨从此想到了念书的问题，但是她已经二十岁了，上哪里去念书？上小学没有她这样的大学生；上中学，她是一字不识，怎样可以。所以仍旧住在我们家里。

弹琴、吹箫、看纸牌，我们一天到晚地玩着。我们玩的时候，全体参加，我的伯父，我的哥哥，我的母亲。

翠姨对我的哥哥没有什么特别的好，我的哥哥对翠姨就像对我们，也是完全的一样。

不过哥哥讲故事的时候，翠姨总比我们留心听些，那是因为她的年龄稍稍比我们大些，当然在理解力上，比我们更接近一些哥哥的了。哥哥对翠姨比对我们稍稍的客气一点。他和翠姨说话的时候，总是“是的”“是的”的，而和我们说话则“对啦”“对啦”。这显然因为翠姨是客人的关系，而且在名分上比他大。

不过有一天晚饭之后，翠姨和哥哥都没有了。每天饭后大概总要开个音乐会的。这一天也许因为伯父不在家，没有人领导的缘故。大家吃过也就散了。客厅里一个人也没有。我想找弟弟和我下一盘棋，弟弟也不见了。于是我就一个人在客厅里按起风琴来，玩了一下也觉得没有趣。客厅是静得很的，在我关上了风琴盖子之后，我就听见了在后屋里，或者在我的房子里是有人的。

我想一定是翠姨在屋里。快去看看她，叫她出来张罗着看纸牌。

我跑进去一看，不单是翠姨，还有哥哥陪着她。

看见了我，翠姨就赶快地站起来说：

“我们去玩吧。”

哥哥也说：

“我们下棋去，下棋去。”

他们出来陪我来玩棋，这次哥哥总是输，从前是他回回赢我的，我觉得奇怪，但是心里高兴极了。

不久寒假终了。我就回到哈尔滨的学校念书去了。

可是哥哥没有同来，因为他上半年生了点病，曾在医院里休养了一些时候，这次伯父主张他再请两个月假，留在家里。

以后家里的事情，我就不大知道了。都是由哥哥或母亲讲给我听的。我走了以后，翠姨还住在家里。

后来母亲还告诉过，就是在翠姨还没有订婚之前，有过这样一件事情。我的族中有一个小叔叔，和哥哥一般大年纪，说话口吃，没有风采，也是和哥哥在一个学校里读书。虽然他也到我们家里来过，

但怕翠姨没有见过。那时外祖母就主张给翠姨提婚。那族中的祖母，一听就拒绝了，说是寡妇的孩子，命不好，也怕没有家教，何况父亲死了，母亲又出嫁了，好女不嫁二夫郎，这种人家的女儿，祖母不要。但是我母亲说，辈分合，他家还有钱，翠姨过门是一品当朝的日子，不会受气的。

这件事情翠姨是晓得的，而今天又见了我的哥哥，她不能不想哥哥大概是那样看她的。她自觉地觉得自己的命运不会好的。现在翠姨自己已经订了婚，是一个人的未婚妻；二则她是出了嫁的寡妇的女儿，她自己一天把这个背了不知有多少遍，她记得清清楚楚。

□□□□□